【調査記録】

出雲地方における食の安全を求めた地域ネットワーク
～井口隆史 島根大学名誉教授からの聞き書き～

大津裕貴*・李　婉**・田中奈緒美***
（*ダムの見える牧場）
（**鳥取大学大学院連合農学研究科）
（***島根大学・寧夏大学国際共同研究所）

摘　　要

井口隆史島根大学名誉教授のたべものの安全を求める活動に関する聞き書きをまとめた。インタビューでは、森永ヒ素ミルク中毒事件や市民運動の経験、島根県内の有機農業運動の展開が語られた。井口隆史氏の島根大学赴任以降の運動を通して、「たべもの」の会と木次乳業との交流の経緯、木次町の有機農業運動の取り組み、生産者と消費者の協働活動の内容が明らかになった。「たべもの」の会の活動を通して、出雲地域における有機農業始動期の地域ネットワークを知ることができた。

キーワード：「たべもの」の会、有機農業運動、木次乳業、出雲地域、木次町

背景

1970年代は食の安全に関心が集まり、さまざまな団体が活動を始めた時期である。この頃に、島根県松江市の消費者を中心とする「たべもの」の会も活動を始めた。「たべもの」の会は、準備会の発足時から木次有機農業研究会の生産物を共同購入している。さらに、「木次の生産者には、『もっと安全な状態で生産し、生産者として誇れるような生産物を消費者に届けたい』という強い欲求があることを消費者側は感じとり、生産者の有機農業運動を共に担っていくことにした。」（桝潟、1983b、270頁）と生産方法への関心も高めていった。

「たべもの」の会と木次有機農業研究会の交流は生産物の売買にとどまらず、協働して安全安心な食べ物の生産・流通・消費を目指す活動を続けてきた。そして、木次乳業の木次牛乳（1975（昭和50）年 9 月～）や宇田川光好氏の平飼有精卵（1976（昭和51）年 5 月～）など信頼できる生産者の作った食べ物を会員に提供し続けた。この頃「牛乳の配達には、ずいぶん苦労をしたようである。会発足当初は発起人が担当していたが、51年の夏頃から発起人だけでは負担しきれなくなってアルバイト体制に移行していった。しかし、配達が不正確であったり、配達時間が不正確等、問題が絶えなかったため、52年 8 月から木次乳業の責任で配送する現在の体制に移行した。」（桝潟、1983b、276頁）と試行錯誤しながら会の運営がなされた。

今回、有機農業運動始動期の様子を知るために、「たべもの」の会発起人の 1 人である井口

隆史島根大学名誉教授からの聞き書きを行った。内容は井口氏の経験を基に、島根大学の回想や食の安全への取り組み、島根県内の有機農業における初期の様子や近年の様子、これまでの取り組みを振り返って思うことなどである。

1．朝霧幸嘉さんや安達生恒先生との交流

私は、京都のど真ん中、御所のすぐ南に生まれ育ちました[1]。当時の京都から言うと、島根や松江はどこにあるかなぁというような感じでした。どんなところかすぐにわからず、家族はとても心配していましたね。でも、非常にいいところだというのが来てみて分かりました。赴任当時は、島根大学自体が田んぼの中にあるような印象でした。農業用の用水路がいっぱいあって、休みの日には釣りに行ったりして、よく釣れましたよ。山や海も近くにあり、そういう意味ではこちらに来て楽しく後悔することはなかったですね。

赴任当初は、島根大学から歩いてすぐ近くの下宿に入りました[2]。平屋の建物に二所帯っていうか、一室は私で、ちょっと離れた一室は夫婦で住んでおられました。まだ独身の頃で床の間付きの和室（八帖）一間で充分でした。下宿は大学から近かったから、学生がよく来てくれましたね。

その頃の農学部農林経済学科（農経）の学生に朝霧幸嘉君が居ました。私と気が合って、下宿に来て頻繁に議論したりして、密に交流していました。彼は卒業せずに東京に行ってしまったんだけどね。東京には、島大農経の卒業生が沢山いて、先輩たちと関りのある仕事をしていたようです。彼の活動が耳に入るようになったのは、彼が地ビールに取り組み始めてから。小江戸ビールだね。小江戸というのは川越のことだけど、そこに本場ドイツの技術者の指導でビール工場を建てて、「小江戸ブルワリー」を作ったんです[3]。残念ながら、若くして彼は亡くなってしまって、それ以降行ってないね。朝霧君は大学闘争を一生懸命やってた中の一人ですよ。だけど、早めにきり上げて、東京へ行ってしまった。もっと面白い違うことをしようと思ったんかな。

あと、安達生恒[4]先生って島大におられたでしょう。随分優秀な学者でしたね。大学闘争で、

---

(1) 井口氏は、1943年京都府京都市中京区京都御所のすぐ南の生まれ。1969年に京都大学大学院農学研究科修士課程を修了し、島根大学に助手として赴任した。

(2) 現在の石橋町バス停付近。

(3) 朝霧幸嘉氏について、詳しくは安達（1997）を参照。安達（1997）では「著者からのメッセージ　本書の主人公・朝霧幸嘉の農業発想はすごい！従来の農業に対する考え方を根本から変えてしまうほどの迫力を持っている。私は、この人ほど農業をまるごと文化としてとらえている男を知らない。農産物を『つくり、運び、食べる』一気通貫の運動を30年以上続けている。地ビールを“農産物”と呼び、蔵の街川越に自ら作ったビアレストラン『小江戸ブルワリー』を食文化の情報センターに仕立て上げた。『農は文化なり』を身をもって実践し、首都圏に食のネットワークを作ろうとしている。朝霧のオーガニック・ファーム構想を、読者とともに楽しみたいと思う。」（安達、1997、カバー）と朝霧氏について紹介している。

(4) 安達生恒氏は島根大学名物教授。2000年10月10日逝去。安達氏の退官記念講義は「この日の記念講義は午前十時から二時間にわたって行われ、安達教授は『選択の目をハードからソフトに切り換える必要がある』という視点から『人口、資源、食糧、環境とみんな二十一世紀への見通しは暗い、技術は巨大化

学生が大学にあんまり出てこなくなって、先生が講義しに行っても誰もいないとか、勉強もいい加減だったようです。だけど、安達先生が調査からたまに帰ってきて講義される時は違いました。もう教室は満員で。農経の学生だけでなく関心のある全学の学生が来て話を聞くような、学生にとって講義内容が充実して面白い先生だったようだね。学生が関心を持っていることをうまく講義のなかに取り入れてやっておられたんでしょうね。

学者としては非常に間口が広いと言うかな。一つのことだけをやるのではなく、もっと視野が広い方でした。いっぱい本も出されていて、全国的にも有名な先生でしたね。安達生恒先生と言えば関係業界では知らない人がいないぐらいだったと思う。島根大学では一番有名で、また、出版物も内容のある素晴らしい先生でしたね[5]。

でも、安達先生と一緒に何かやるっていうのは、亡くなる少し前程度であんまり出来なかったね。そういう元気な時期とずれてたんだろうなあ。現地でいろいろ調査されたと言っても、私はちょっと分野が違うということもあったかもしれません。林業の事はあんまりやられなかったからね。農業の方だよね。農業経済の非常に優れた先生という感じかな。とにかく、すごい先生だったね。話も上手だし。

私の所属していた林業経済学講座[6]は、当時、教授は中尾鑛（ひろし）先生で助教授は北川泉先生でした。だけど、中尾先生は島根医科大ができたときに医大に代わられました。その後、北川先

し、原子力発電にみるようにテクノファシズムが強まる一方だ。それなのに大多数の人は、二十一世紀に生きるには、効率化、機械化、大規模化といったハードな近代化、合理化でなければダメだと思っている』とハード論を批判したあと『安全性、創造、連帯性、自然保護などソフトで人間的なものに価値を置くことが次代を切り開くカギになる』と説いた。」（山陰中央新報1981年３月15日付、18面）と報道された。また、安達氏が逝去された際に、井口氏は朝日新聞のインタビューに「過疎法成立前のかなり早い時期から、過疎問題に取り組んでおられた。有機農業が世間に広く知られるはるか以前の七〇年代、その有効性を指摘していた」（朝日新聞2000年10月12日付、31面）と答えている。

[5] 安達氏は1975年に安達生恒編著『農業の論理とはなにか　近代化と農民』（『講座・農を生きる』第１巻、三一書房）と安達生恒編著『“たべもの”を求めて　食糧危機と農民』（『講座・農を生きる』第２巻、三一書房）を出版した。この２つの著書について井口氏は「一巻において、氏は、生産の側から“たべもの”を生み出すべき“農”が、いかなる現状に置かれているかを問い、二巻においては、視点を更に消費の側及び生産（者）と消費（者）の関係のあり方をも含めたものに拡大し、“食糧危機、[ママ]”“たべもの”を思想的、文明論的に位置づけたのである。この安達“たべもの”論は、一般の目に触れやすい市販書として刊行され、“農”、“たべもの”という表題をつけたことから、その語を一般化し、内容の大衆的認識を深めた点で、まず第一に評価される。また、我々の食生活からの“たべもの”の喪失の必然性を理論づけ、有吉氏の問題提起を一歩進め、各地の生産者と消費者の交流を紹介することによって、具体的方向性を示した点については更に高く評価されるであろう。その結果は、必ずしも安達“たべもの”論のみの影響とはいえないにしても、既に全国各地に点在的に生まれつつあった消費者と生産者の交流、『産直』運動を一気に加速したのである。例えば、松江市に“「たべもの」の会”という消費者のグループがあるが（一九七五年八月三一日準備会結成、木次有機農業研究会に所属する生産者と交流）、会の発足の契機の一つに上述安達編著の二書があるし、また会の名称も書名にヒントを得て付けられている。」（井口、1981、127-128頁）と自身の活動への影響も明らかにしている。

[6] 1989年の農学部改組まで林業経済学講座があった。林業経済学講座誕生の様子は猪股（1981）に詳しい。伊藤勝久氏は1983年に島根大学赴任。北川泉氏は島根大学長を1995年４月６日～1999年４月５日の間務めた。

生が教授になられ、私も講師になって、助手に伊藤勝久さんが京都大学から来てくれ、三人でいろいろなことをやるような感じでした。だけど、北川先生が学長になられて校務に忙しくなってからは、三人が一緒に集まって研究するのは、残念ながら、ほとんどできませんでした。

2　食の安心・安全を求める市民運動

2．1　森永ヒ素ミルク中毒事件

森永ヒ素ミルク中毒事件といえば、本当にずいぶん昔の事件になりましたね。子供がたくさん亡くなったり、病気になったりしました[(7)]。だけど森永は、ずーっとこの事件の責任をまともに認めなかった。結局、森永はキチンとした責任を取らずに終わってしまったっていう感じだね。島根大学に赴任してから、いろいろと取り組んだんだけどね。基本的に森永ヒ素ミルク中毒事件の中心は岡山の方だから、松江や島根県での運動というのはほとんどないけど、岡山の方でやった活動を支援したり協力するような感じでしたね。それと、松江や出雲でも子供にいろんな問題がでてきて、1970年代前半頃には被害者の家庭に聞き取りに行ったりもしました。しかし、そういう人たちはだんだん諦めてしまうっていうか、いつまでもそういう問題に関わるということはなかなかできなかったんだろうね。だから、だいぶ前に一応収束したことになってしまってます。もう出てこないかも知れませんね。歴史の彼方に隠れてしまって終わったんだ。森永乳業はけしからんと思う。個人として、今でも不買（運動）は続けています。

森永の問題なんていえば本当に大問題だけど、今はどこで何があったんかなっていう感じだよね。まぁ、こっちのやり方も不十分だったんだろうけど。どれぐらい意味があったのかな、なかったのかもしれんけど。被害者の人たちのその後はどうなっただろうな。

いろいろな問題があったね。あの頃はそういうことを問題にして取り組む人が沢山いたからね。森永の問題だけでなしに、いろんな運動が盛んだった頃だね[(8)]。水俣の問題なんか今でも、いろいろ現地で運動があるし。そういう運動にまだちょっとは支援という形で関わったりしてはいるけど。もうこちらで運動は、ほとんどないからね。

今は、大体、仲間を作って何かやるっていうのが非常に難しい時期なんですね。昔だったら、この問題を市民に知ってもらうためにデモしようと言えば、松江でも皆うわーっと関心のある人が集まってたね。それは森永ヒ素ミルク中毒事件の活動をやってる時でも、もっと社会に情報を流した方がいいっていうときには、少人数でも主張を書いたものを作って持って歩いたりしてました。島根大学の正門を出発して、県庁前を通って松江駅で解散とかね。我々の経験で

---

(7) 島根県における森永ヒ素ミルク中毒事件被害の様子は、1956（昭和31）年２月10日時点で患者数285人、死者４人であり県下全域で患者が報告されている（志水ら、1971）。

(8) 井口氏は、「たべもの」の会と森永ヒ素ミルク中毒事件と水俣の問題に積極的に取り組んだ。水俣の問題は、水俣で運動がある際に参加する等していた。また、森永ヒ素ミルク中毒事件を受けて「森永ヒ素ミルク中毒事件の恐ろしさは、発生当時の急性中毒についてはもちろんであるが、体内に入ったヒ素が永い間にどれだけ子供たちを蝕み、後遺症となって出現したかということであった。一九五五年当時、どの医師も問題にしなかった後遺症が、広範囲の子供たちに残っていたことがわかったのは十数年も後のことであった。ヒ素という明らかな毒物でさえこうなのであるから、現在の複合汚染といわれる人体をも含めた環境汚染の結果は予想できない。」（井口、1978a、９面）と認識を語っている。

も、みんなで歩いてるうちに中に入ってきたりする人もいるし。森永の問題にしてもそうするしかなかったというか、ほっとけないようなひどい状態があったからだね。

2．2 「たべもの」の会

「たべもの」の会は、有機農業に関心のある消費者が実際にものを買ったりという協力をするようになったのが始まりです[(9)]。これも、随分前ですけどね。環境問題とかいろんな問題に関心持ってる人が三、四人集まって、いろんなことを話してる中で有機農業のことも出てきたんだろうな。食べものの事にもっとこだわって、ちゃんとしたものが手に入らないだろうかと考えて生産者を探してるうちに、今の木次町の辺りに木次有機農業研究会があることを見つけ出してね。相手は木次乳業が中心で、そこから牛乳をもらいましょうということになりました[(10)]。全国的に共同購入するような組織が活動し出したちょっと後だったから、「たべもの」の会の参考になる事はいっぱいあったと思う。ただ、生産者がいるかどうかはね。そんなに遠いとこから持って来るわけにいかんから。

木次有機農業研究会はいろいろと考えて広げていくんですよ。牧場を作ってみたり。我々とも、だんだんといろんなことを一緒にやったけど、最初は牛乳だけですよ。最初はね。一番扱いやすいものってことだったんです。向こうは自分たちの考える理想のものを作りたいという希望もあるし。それは消費者にとってもいいことなんだけど。でも、それをするには条件がいるよね。いくら良いものを作っても売れんかったらいかんし。それを買ってくれる人がいないといかんよね。最初の頃は、木次牛乳は松江にはなかったの。だから、この辺りでみんなに飲

---

(9)「たべもの」の会について桝潟（1983b）は、「有機農産物をはじめとする「たべもの」の共同購入を行うこの会は、後に発会時の発起人となる４人（代表の井口隆史さんもその１人）が集まって、食品公害の問題について考え、討論し合ったことがきっかけとなって生まれた。森永ヒ素ミルク事件の被害者支援活動や反公害運動に関わるなかで食品公害の問題にも目を向けるようになった人たちは、長時間の討論の末、『安全な食生活を可能にするためには、食べものの場合、既存の流通システムによって供給される食品を拒否する以外にない』という結論に行き着いた。そして、本物で安全な「たべもの」を探し求める過程で、木次町の有機農業を実践する生産者たちと出会ったのである。」（桝潟、1983b、269-270頁）と森永ヒ素ミルク中毒事件などの市民運動が「たべもの」の会の活動につながった様子を紹介している。さらに、井口氏は「たべもの」の会の活動経験もとに「新しい消費者運動」（全４回）を山陰中央新報に連載した。連載第２回では「私は、これからの消費者運動は今までとは全く違った視点を持たなければならないと考える。すなわち自分自身の生活のあり方を肯定し、それをいかによくするかという視点から物事を判断するのではなく、自分自身の生活のあり方を見直すところから出発しなければならない。それは基本的には大量生産・大量廃棄の見直し（否定）であり、もう一歩踏み込んでいえば再生可能な資源利用を基本とする社会・生活・文化の構築に行きつくであろう。したがって、食べものの安全性の問題にしても食の体系をそのままにして部分部分をより安全なものに置き換えるといったやり方ではなしに、何故危険性の大きい食生活しか送れないのかというところから出発し、生産・流通・消費のあり方を総体として追求しなければならないのである。」（井口、1978b 年、９面）と自身の考えを明らかにしている。

(10)桝潟（1983b）には、「とりあえず牛乳と卵の共同購入から取り組んだが、始まったばかりの頃は、発起人が牛乳は毎日、卵は週１回、片道車で１時間ほどかけて木次まで取りに行ったということである。」（桝潟、1983b、274頁）と共同購入開始直後は発起人の努力に支えられていた様子が紹介されている。

んでもらうような仕組みを作るっていうのは、新しく出来た「たべもの」の会の一番最初の仕事でしたね[11]。どういう条件で、どうしたらできるかっていうのは三、四人いた仲間で話し合って。やっぱり、最低百所帯とか二百所帯ないと、木次から松江に持ってきて消費することはできないから。会員を募って。最低限ということで、最初は会員数百軒ぐらいから出発しました。目標二百軒ぐらいで、大体二百軒ぐらいのことが多かったかな[12]。もちろん、ちょっとでやめていった人はいっぱいいますよ。

その後も、木次乳業といろいろと協議しながら、どういうものを作ってほしいか希望を出してね。それで、内容も消費者の希望を加えて豊富になっていきました。それに、生産者がこういうことやりたいって言えば、その試みをやってみましょうと話合ったりしてね。だから、値段は普通のより少々高くても引き取りますよとか。そういう、生産者がやりたいことができる最低限の条件を作らんといかんからね。それは消費者の対応次第だから[13]。今は我々が共同購入しなくても、スーパーに行ったら木次乳業の商品が買える、一般の市民が買ってくれる状況になってる。「たべもの」の会も役割を果たしたことから終了しました[14]。

「たべもの」の会は生産者と消費者が一緒になって新しいことをやりながら、理想的な方向へ変化する。できたものを単にもらうだけじゃなく、自分らも参加して自分らの希望通りのものを作れるような条件を作っていく。作ってもらったものは、こちらで消費者に分けるっていうのを目指してたんでしょうね。木次の生産者も最初の頃に作ってた牛乳から随分進歩してま

---

(11)木次牛乳を扱った「たべもの」の会の活動を朝日新聞は「『安全なたべものを継続的に安定してだれもが手に入れられる』のが会の目的だ。大原郡木次町の生産者とタイアップし、無農薬牛乳を主体に、共同購入方式で消費者に配達しているが、発足三カ月。運営はようやく軌道に乗ってきている。」（朝日新聞1975年12月14日付、12面）と紹介した。会の考え方や運営方法は井口（1978c）井口（1978d）で紹介されている。

(12)「たべもの」の会の会員数は、井口（2013）によると「「たべもの」の会は、一九七五年九月の準備会発足時点での会員数は約一〇〇世帯、牛乳一日約一二〇本、七六年五月に正式に会として出発した時点でも会員数一五〇世帯、牛乳一日約三〇〇本という程度でしかない。」（井口、2013、47頁）。また、1978年８月には、「二年半を経過した現在、消費者百五十世帯、生産者七、八名と拡大している。」（井口、1978c、９面）と紹介されている。

(13)消費者である都市住民と生産者である農山村住民の交流について、井口（1995）は「都市住民に農山村を理解させるのは、かなり困難なことなのである。農山村住民にとっても都市住民を単なる観光客等として受け入れるのは比較的簡単であるが、対等な立場で付き合うことは難しい。」「農山村の自立にとって真に意味のある交流（都市と農山村との共生を目指すという内容を持った交流）ができているのは、例えば有機農産物を通じての『提携』（『産消提携』という言葉で同じ意味が表現されていることがある）ではないかと思われる。」（井口、1995、338頁）と分析している。

(14)「たべもの」の会の活動が生産者と消費者の協働に成功した理由について井口（1995）は、「『交流』が農山村地域の発展に寄与するには、かなりの長期を要する。目覚ましい効果などは、交流にはもともと期待できないものだともいえる。そうした中で、木次乳業の事例は、ユニークであり、内実を伴ったものであった。長い時間をかけてここまできたのではあるが、町村の枠に捕らわれず広い地域一帯の生産者の連帯の輪を広げ、消費者とも辛抱強く交流してきた努力の積重ねの成果だと思われる。それには理念の相互了解があり、双方に交流の主体が形成されていたこと。さらに目的を明確にした生産者と消費者のグループ同士の交流であったことが成功に結びついた第一の要因であると思われる。」（井口、1995、343頁）と自身の考えを明らかにしている。

す。変わっていってますね。

木次乳業は全国的にも名前が売れたし、県外でも木次乳業の商品が売られている。県外で販売されはじめた頃に聞いたのは、東京とか東の方へ行ったら、木次牛乳は特別な紙に包んで売ってくれるぐらいの高級品・贈答品だったようだね。その基本の地元での一応の基礎になるようなことに、我々がやったことが少しは役に立ってるかもしれん、とは思いますけどね。「たべもの」の会はなくなってしまったけども。会の活動は悪くはなかったんだろうね。昔に比べると木次乳業もだいぶ変わったし、どんな風になっていくか分からんけどね。

3．有機農業運動の様子

3．1　木次町を中心とした有機農業

木次乳業はちょっと異端っていうか、農業全体の流れからいうと非常に地域的っていう感じだったね[15]。今は全国的に知られるようになってるけど、初めの頃は地域外で知ってる人ってそんなに多くなかった。京都の食の問題やってるところとか、食べ物の運動をしているグループが評価したりとかはあったと思うけどね[16]。

私の佐藤忠吉さんとの交流は木次乳業のことに関わったときから[17][18]。70年代の初めぐらい

---

[15] 桝潟（2008）や井口（2013）など、木次乳業の取り組みについては数々の研究・報告がある。

[16] 木次乳業と各地の消費者グループとの交流の様子を井口（1995）は、「消費者グループとの提携は、次々に広がっていった。七三年松江市の玄米食養グループとの提携、七五年松江市の『松江たべものの会』、同年『枚方食品公害と健康を考える会』、七六年出雲すこやか会、七八年『京都使い捨て時代を考える会』、七九年『神戸鈴蘭台食品公害セミナー』等々である。こうした提携は、単に農産物やその加工品の供給と消費との関係に留まらず、様々な物心両面に渉る相互関係に及ぶものであった。」（井口、1995、340頁）と紹介している。特に桝潟（1983a）は「たべもの」の会と木次乳業の交流が１つのきっかけであったと紹介している。「木次乳業が量的にも質的にも飛躍したのは、昭和五〇年以降です。消費者グループとの交流・提携が急速に増え、これを契機として牛乳処理量が飛躍的に伸びる。他方では、牛乳の良質化が試みられ、低温長時間殺菌牛乳が開拓される。この飛躍へのきっかけとなったのは五〇年から始まる松江市の“「たべもの」の会”との交流でした。この交流のなかから、『生産者と消費者とのつながりが毎日確認しあえるもの』ということで、木次乳業の牛乳が“「たべもの」の会”に送り届けられることになりました。そして、この提携関係が新聞に報道されたこともあって、各地の消費者グループとの交流・提携が盛んになり、同時に牛乳処理量も格段と多くなりました。」（桝潟、1983a、20頁）。

[17] 木次乳業の佐藤忠吉氏への取材をもとにした森（2007）は木次乳業と「たべもの」の会の出会いを「最初においてくれたのは松江の自然食品店で北脇さん、この人が店に十本ばかり置いて、クリスチャン関係の人に普及してくれた。ついで松江では一九七五（昭和五十）年ころ、島根大学の林業経済学の井口隆史先生が会長で「たべものの会」（およそ百世帯）ができました。そこともつながりができました。この会は森永砒素問題被害者の支援活動からはじまり、『受動的に並べられている商品の中から比較的いいものを選択するだけではだめだ』というので、既存の流通システムによって供給される食品を拒否するといい出していました。」「こうした消費者たちは納得のいく生産者との出会いを渇望していましたし、私たちの方でもそういう関心の高い消費者との出会いを求めていた。立場こそちがえ、双方『食』と『生き方』の全体的な見直しを求めていたんです。」（森、2007、119-120頁）と紹介している。

[18] 井口氏と木次乳業の交流は、木次に集う会（委員長：井口隆史）を通しても行われた。木次に集う会は、「木次乳業の新工場建設を契機として、組織されたものであり、その主旨は、木次乳業にかかわる生産者・消費者・工場関係者が一堂に会し、交流を深めると共に生産のあり方から今後の方向、消費者と

だったかな。他にも熱心な生産者として酪農家の大坂貞利[19]さんや養鶏家の宇田川光好さん。生産者の方々の中心でやってるような人の何人かと交流が始まったね。佐藤忠吉さんは日本のこともちろんそうだけど、世界中から情報をいっぱい集めて判断材料にしていらっしゃったね。生産者としては、佐藤忠吉さんのお父さんが非常にしっかりした人だったみたいだね[20]。

それと、加藤歓一郎[21]さんの影響はあったと思うよ[22]。生産者の中に加藤歓一郎さんの教え子だとか親しかった人というのはかなりいるしね。場所もそうだし。クリスチャンがだいぶいるんじゃないのかな。木次の熱心な生産者は大体、加藤歓一郎さんの薫陶を受けたような人が多い。生産者としての考え方みたいなもんだろうけど、農的なものの評価がやっぱり普通の人とちょっと違うっていうかね。みんなを束ねるところには加藤歓一郎さんがいらっしゃって。

して果たすべき役割等についてまで、三者から意見を出し合い、お互いにお互いの立場を理解し、尊重しつつ行動しようとするものである。第五回（準備会を除く）まで開かれている」（井口、1995、340-341頁）。木次に集う会は、「会には一楽照雄有機農研協同研究所顧問、室田武一橋大教授なども参加、一泊二日で農山村における地域自給の方向性を探ることにしている。『農業の原点を見直す』という木次乳業の問いかけは、消費者をも巻き込んで全国的な運動に広がりつつある。」（日本経済新聞1988年１月17日付、11面）と報道された。また、他日の報道では「自然食品に関心の深い消費者や専門家が集まり、話題は日本の農業のあり方まで発展することも多い。商品開発のヒントもここから生まれると言う。」（日本経済新聞1994年12月27日付、23面）と会の様子が紹介されている。

[19]大坂氏について桝潟（1983a）は「酪農家大坂貞利氏は、熱心な無教会派クリスチャンであり、この地の無教会派の指導者で生活綴方教育（『日登教育』として知られる）の指導者でもあった加藤歓一郎（昭和五二年没）の『直弟子』としてその思想的影響を強く受け継いでいます。大坂氏は加藤歓一郎を通してシュバイツァーを知り、その思想と実践にも学んでいます。」（桝潟、1983a、16頁）と紹介している。そして、大坂氏は自身の農業に対する考え方について「日曜礼拝を基本に一週間の生活が出来、乳と蜜の流れる所には又、米あり野菜果菜はもちろんのこと四季を通じて花も咲く。」「平々凡々の百姓なるが故にそれをかすめ取る者もなく、それを恐れる心配もない。ただそれを悪として感じ感謝が出来るかを恐れねばならぬ。この様な考え方に立つ農本主義が必要ではないか。儲かる儲からないとかコスト云々ではなく、儲かっても儲からなくてもやる。ただ恵としてやる。見ていて下さる神様は終りの日に最高の冠を下さる希望がある。コストを下げて消費者のために私はやったなどと考えることに私の信仰は賛成しない。」（大坂、1974、357-358頁）と表明している。

[20]森（2007）に詳しい。

[21]加藤歓一郎氏は無教会派のキリスト教者。日登中学校校長時代には「週２晩の青年への自宅開放、土曜夜間の木次町での伝道集会、森信三、芦田恵之助、久宗荘、松丸志摩三、波江虔、国分一太郎らを招き社会教育の場をつくった。」（松原、1982、385頁）。自身の考えについて「学校教育と社会教育と伝道の三本柱が私の師範学校時代からの夢であった。これはペスタロッチの思想とロバートオーエンの思想、後にトルストイの思想の影響であった。この三つが三角形の頂点で時に学校教育が頭を出し、時には伝道が主となり、又、社会教育が戦後は大きく出て来た。この三つを統一調整して行くことは中々むづかしかった。」（加藤、1974、301頁）と記している。

[22]佐藤忠吉氏に取材した和仁（2017）は、加藤氏の影響について「佐藤、大坂の二人に対して強い思想的な影響を与えたのが、木次町立日登中学校校長だった加藤歓一郎という、無教会派のクリスチャンでかつ行動的な社会教育の実践者であった。」「それらの生活哲学を学ぶ中から、大坂たちは自然農法へ傾倒し一九七二（昭和四七）年、一五人くらいの同志を集めて『有機農業研究会』を発足させる。この研究会に佐藤が参加し強い影響を受ける。今でも佐藤は『木次乳業の考え方の原点は、大坂さんのいわれたことと、加藤先生の指導された研究会だったですよ』という。」（和仁、2017、113頁）と紹介している。

みんなにいろんな意味で影響を与えた人。教えを受けたっていうことでは繋がってるよね。日登や寺領といった木次の地域にとっては非常に大きな、思想的な何かだったんだろうね。

そういう意味では加藤さんと言う人はすごい人だね。単に熱心なクリスチャンというだけでなく、影響力を持つというのはやっぱりその人の説得力とか行動とか、何かがその上に結びつくような、そういう優れた人だったんでしょうね。ああいう人は今、あんまりいないね。日曜学校みたいな集まりをやってた。ずっとね[23]。でも、佐藤さんは仏教徒なのに、そういう人がまた別にいたっていうのがね。お互いに了解というか、協力して、理解はできてたんでしょうね。何かの争いがあったとか喧嘩したとかいうのは、聞いてないね。

3．2　島根の有機農業

島根県内の有機農業運動だと、東部は木次が中心で、西部は柿木村が中心だね。村全体として取り組んだっていうのは、柿木村ぐらいだろうね。地域全体でね。その影響はいろいろあったんだとは思うけどね。柿木村の一つの中心になった人は、福原圧史さん。地域だけでなく、全国の有機農業協会の役員もやってる人だね。

島根で全県的に知られている活動は福原さんたちのグループと木次乳業を中心にしたものかな。ちょっと違う形で弥栄之郷共同体っていうのがあったね。弥栄之郷共同体は全国的にもよく知られてる活動です。若い人が中心になってみんなで共同生活する。そういう意味では非常にユニークな存在だよね。

あと、有機農業に興味を持って自ら取り組む生産者って、結構あちこちにいるんですよ[24]。だけど、探すと、その人限りとかその人の周りだけでなかなか広がらない。そういうことにみんなが関心持ってるときは、割とわーっと広がるんだけど。それが続かなかったら、ダメだね。

---

[23]加藤氏は一時、週六日の学校勤務の他、土曜夜の木次伝道会に加え木曜夜と火曜夜にも伝道会を開催している。そして、「三年に亘ったこの土曜夜の伝道会も二十五年になって木次が日本基督教団から分れてナザレン教団に加入し協会を里方の藤原運一郎宅に転じ藤原牧師が牧会することになった。」「私は元々無教会主義だから伝道の協力はするが組織には入らず、日登寺領の家で火、木の会を木次出張がやめになったからこれを土曜夜の集会とし、何時しかその名も土曜会と言うようになった。」「土曜会は山本信夫君や大阪富雄君らによって愛農会の流れが入り農村問題農業技術とキリスト教、と云うテーマではじめ賀川豊彦の立体農業ついで小谷純一の愛農救国の書の研究実践となる。」「二十五年から福音書講義に入った。即ちこれまでがキリスト教導入期間で色々とバラエテーに富んでいたがだんく単純化されて英語研究半分と聖書講義であった。」（加藤、1974、305-306頁）と加藤氏は土曜会の開催の経緯や様子を記している。土曜会は1977年３月に加藤氏が逝去して以降も続いている。加藤氏は土曜会の他にもさまざまな学びの場を作り出した。

[24]井口氏は山陰経済ウィークリー誌上で「有機農業に挑む」という連載を担当し、島根県内の農家の紹介を行っている。取り上げられたのは、佐藤順一氏（井口、2011a）、松浦幸一氏（井口、2011b）、月山茂夫氏（井口、2011c）、白濱松喜氏・八重子氏（井口、2011d）、松浦利忠氏・廣子氏（井口、2012a）、宇田川光好氏（井口、2012b）、反田孝之氏（井口、2012c）、田中海太郎氏（井口、2012d）、斎藤忠正氏と両親（井口、2012e）である。まとめとなる第10回（井口、2012f）で「かつて有機農業を目指す農家は異端者とされることもあった。しかし、近年は新規就農者が有機農業を希望すれば、実現に向けて配慮がなされている。新規就農の大変さは変わらないだろうが、過疎高齢化の地域などでは温かく迎えられるように変わりつつある。」（井口、2012f、31頁）と現状を分析している。

そういう意味では木次のあたりは繋がってきてるから、いいんだけどね[25]。

それでもどうなっていくかね。木次乳業も大変だよ、きっと。いくら中身がいいと言っても、価格が高い牛乳はそれほど売れないから。チーズでも北海道で作っているものと比べると相対的に高い値段がついてるからね[26]。価格が高いチーズにはちょっと手が出ないっていうのが一般の人だよね。よっぽどそういったことに関心のある人は別だけど。

3．3　有機農産物の自家消費

日本であれば有機農業という言葉はよく出てくるし、有機農業の良さについて話をする人もいるかもしれないけど、実際にお店に行って「これは有機農業で作ったものです」という表示はほとんどないね。ちょっとだけはありますよ、端っこの方に[27]。だから、これだけ食品の安全性について言われてるのに、それでいいのかなという気はするけどね。興味を持っている人は、安全安心な食品かどうか注意してるけど、ほとんどの人はそこまで内容に注意していない。注意っていうか、食品の作り方まで考えて選択していなさそう。だから、そういう意味では、貧しい社会かもしれません。

一方で、最近、自分の庭とか、ちょっとした空き地に自分の考え通りのやり方で野菜を作ってる人はいるよね。うちの庭でも、奥さんがやってるしね。そういうのが日本のあちこちに見られるようになってきてるね。すでに、ヨーロッパはかなりの面積をそういうことに使ってるみたいだね。汽車に乗っていても両側に畑がずーっとあって。もちろん業者じゃなくて、一般の市民がいろんな野菜を育てられる場所がたくさんある。日本の場合も、ちょっとずつそんなのができていってる、いろんなところに。そういうのがもう少し広まっていくっていうことは

---

[25]世代間の縦のつながりだけでなく同時代の横のつながりについても、井口氏は「厳密にやり出すと自分の農地と他の農地との関係も出てくるからね。隣でやってたら、こちら何の影響も受けないかいうとそんなこともないしね。だから、取り組みは地域でやらないとあまり意味がないということ。運動としてその地域として取り組むような事例は、あちこちにあるよね。」と2023年５月18日のインタビューで答えている。

[26]木次乳業のチーズ作りは、蔵王酪農センター（宮城県）で行われた研修に佐藤忠吉氏が参加したことで始まった。「そのセンターが一九八一（昭和五六）年に日本で初めて『国産ナチュラルチーズ製造技術研修会』を藤江才介を講師としてスタートさせた。」「佐藤は、チーズの製造技術を島根に持ち帰るのは自分しかいないと決心していたから、必死に藤江講師に食い下がって聞こうとする。一方藤江は佐藤のチーズ製造への熱意がうれしかったのだろう。佐藤には他の受講生より親身に教えたという。その後、藤江は木次町の工場にまで出掛け、実際に木次乳業の技術顧問としてチーズづくりを指導している。」（和仁、2017、115-116頁）と当時の様子が紹介されている。

[27]有機農産物の商品化について、井口（1996）は先駆的有機農業生産者の「消費段階での安全な有機農産物という側面ばかりが先行し、実質的な中身を決定する生産段階にまで消費者の理解と関心が及んでいないことである。生産者がどういう状態で生産に取り組んでいるかという点に関する理解が全く不十分なのである。また、有機農業生産者達が目指す方向、期待する交流についても同様である。その結果、安価で見かけの良いもの、有機農産物としては不十分な、まがいものが横行することによって、かえって本物の生産が停滞ないし後退している」（井口、1996、９頁）という見方を紹介し、有機農業をめぐる問題点として①単なる商品としての有機農産物の横行②逆行する新農政の方向③自給率を下げる輸入有機農産物の急増を挙げている。

あり得るかもしれない。どれぐらい何か作っておられるかは知らないけど、ほんのちょっと農地があれば四、五人の家族が食べるくらいならなんとかなるからね。

さらに、畑を作る行動自体が生きがいというか、自分の楽しみになっているという人は松江でもたくさんいますよ。だんだんそういうふうになってきてますね。

4　これまでの活動を振り返って

4．1　「たべもの」の会を通した幸せの形

自分で作ったものや自分たちで中身がわかるものを生産できるし、食べられるというのは幸せの形かもしれませんね。それは60年代から70年代あたりの、本当に信頼できるような食べものがなかなかない頃というか。よっぽど自分で選ばないとまともな物が食べられない、手に入らないというような時代背景もあったのかもしれない。大坂さんの飼ってる牛から搾った牛乳しか飲まないというか、それが欲しいとかね[28]。

70年代頃は食べることの意味を非常に熱心に議論したり考えたりして、人が食べ物を作っていくことについていろいろと関心を持っていたと思う[29]。なんでそうなったんだろうね。やっぱり、いろんな関心を持ってるうちに普通に食べている食べ物がまともなものじゃないって気づいたのかな。今、そこらにあるものがもっと安心して食べられるものにならないかなという気持ちはあっただろうね。

でも、なかなか安全安心な食べ物はない。自分で作るか、ちゃんと選択しないと手に入らない。我々も、いろんな問題があったのをどうしたらいいか、少しでも安全なものをどうやっ

---

[28] 桝潟（1983b）はその様子を「木次乳業がこれまで消費者グループの絶大な支持を得てきたのは、原乳の乳質を高めて低温殺菌の牛乳を供給してきたからであるが、そのきっかけは、木次牛乳（当時は120℃２秒の超高温殺菌）を共同購入して飲んでいた“「たべもの」の会”の会員が大坂さんのところで飲んだ搾りたての牛乳をとてもおいしく感じたことにあったといわれている。思い返してみると、木次牛乳の前身の『梅木牛乳』の頃は、上にクリームが浮くので混ぜてビンに詰め、飲むときにはまた振って飲んだもので、『もとはそげだったなあ』、『牛乳がうまかったなあ』という話になり、『高温殺菌牛乳は水っぽい』という“「たべもの」の会”の問題提起が刺激になって低温殺菌による牛乳処理方法をもう一度見直すことになったということである」（桝潟、1983b、267頁）と「たべもの」の会会員と大坂氏の交流が木次パスチャライズ牛乳誕生につながったと紹介している。

[29] 井口氏は有機農業に対する関心を持ち続け、第28回日本有機農業研究会全国大会（しまね大会）の大会実行委員長を務めた。しまね大会の開催と委員長を引き受けた経緯について「出雲すこやか会や、まいにち生協など関係団体の勉強会で、有機農業研究会の山陰地方幹事を務める佐藤忠吉木次乳業相談役が、県内でも有機農業の動きを広めようと呼びかけた。全国大会開催は初めてで、山陰の会員が九十人と少なく不安もあったが、思い切って引き受けることにした」（山陰中央新報2000年１月30日付、18面）とインタビューに答えている。大会の様子は「県内をはじめ北海道から鹿児島まで全国各地から有機農家や研究者ら約七百人が集まり、分科会や講演会に出席した。」「基調講演では安達生恒・島根大名誉教授が有機農業の歴史について話した。「有機農業が始まった当初は、スーパーマーケットが農薬を使ったきれいで真っすぐなキュウリを求めていた時代。現役の農家には広がらない限界があった。だが農薬の影響が注目されるようになって、子どもの食生活を預かる母親が有機農業に市民権を与えた」と振り返った。」（朝日新聞2000年２月６日付、29面）。その他にも、農業と環境を考えるフォーラムなどの実行委員長を務めた。

たら手に入れられるか考えて、作ってる人にお願いに行ったりしたこともあったな。だけど、全体としては、ほとんど考えていない生産者が多かった。木次とかの少数の人が中心だったね[30]。だから、食べ物の安全安心に対する運動に近いようなもので、グループを作って生産者といろいろと話し合って、信頼できる人や食べ物は大事にしていこうという気持ちはあったね[31]。

安全安心な食べ物が支持されるようになっていくに従って、だんだんと有機農業とかが広がっていったという動きはある程度あったと思うよ。その動きを記録して整理しておけばよかったけど。

4．2　島根大学生へのメッセージ

島根大学の卒業生で、東京とか関東の方で今でも活躍してる人がいろいろといますよ。昔は、この人はなんか頑張ってやりそうだなって在学生を、島根大学の教員から卒業生に紹介して繋いだりもしてましたね。そういう意味では、島根大学はいろんな役割を果たしてきたんだね。

私が在職している頃はそれほど多くなくて、ちょっと前の世代だったかな。安達先生の影響も大きかったのかもしれません。私が知ってるのは朝霧君くらい。彼は岡山出身だけど、東京の先輩を頼って関東へ行きましたね。そこでいろいろと教えてもらったり、紹介してもらったりして、いろんなことやって。その一つが、小江戸ビールを作るということに繋がったんだろうね。卒業生がどのように活躍しているかが全部わかっていくと、島根大学というか地方大学の農学部がどんな役割を果たしていたかが分かるかもしれないね。

昔から、島根大学はいい人を送り出してるということは確かにあるみたいですよ。地方の大学でいろんな人をあれだけ送り出したっていうのは良い方かもしれない。これからも、島根大学が人を育てていける場所であると嬉しいね。

本当に、意外な人が島根大学の卒業生だったり、島根大学の卒業生が意外なところで活動していたりするかもしれないよ。あなたたちもそういう人になって欲しいと思います。

---

[30] 桝潟（1983b）は、木次乳業と「たべもの」の会との交流が木次有機農業研究会や木次乳業にとって画期的な出来事になったと分析している。「１つは、松江市をはじめとする県内および県外の木次牛乳の需要を連鎖反応的に創出したことである。」「もう１つは、“「たべもの」の会”の会員との交流のなかで、木次乳業の経営をまかされていた佐藤さんや木次有機農研のリーダーの一人である大坂さんが乳処理の原点にもどって低温殺菌の牛乳づくりを決意したということである。」。そして、「低温殺菌で処理するには牛乳の清浄化を図る必要があるため、木次乳業に出荷する酪農家に有機農業の実践と清浄化を強く要請した。」（桝潟、1983b、266-268頁）

[31] 生産者への配慮について、（井口、1978d）は「今までのように消費者が、曲がったキュウリはいやだ、虫食いリンゴは気持ちが悪いなどといっているうちは、安心して食べられる本物の食べものなど手に入りはしない。農薬や化学肥料を使用しない生産方法というのは、生産者にとっても初体験なのだ。したがって、少なくとも技術が確立するまでは、出来、不出来にかかわらず、生産者の生活が成り立つように、消費者側が十分配慮しなければならない。」（井口、1978d、９面）と発信している。

謝辞

聞き書きを行うにあたり、井口隆史先生には幾度もインタビューの時間を設けていただきました。また、井上憲一先生（九州大学）と山本伸幸先生（森林総合研究所）には草稿に目を通していただき助言をいただきました。さらに、査読者からも貴重な助言をいただきました。ありがとうございました。

インタビュー　メモ

インタビュー日：2022年11月９日、2023年４月27日・５月18日・６月15日・７月13日
参加者：大津裕貴、李婉、田中奈緒美
場所：島根大学生物資源科学部３号館216室（島根大学・寧夏大学国際共同研究所分室）

表-１　インタビューに関連する出来事

西暦	できごと
1955	森永ヒ素ミルク中毒事件　発生
1969	井口隆史氏 島根大学へ赴任
1972	木次有機農業研究会　発足
	弥栄村に有志が入村
1975	有吉佐和子「複合汚染」（新潮社）単行本出版
	安達生恒編「“たべもの”を求めて：食糧危機と農民」（三一書房）出版
	「たべもの」の会準備会　発足（９月）
1976	「たべもの」の会　発足（５月）
1981	柿木村有機農業研究会　発足
	国産ナチュラルチーズ製造技術研修会（蔵王酪農センター）開催
1991	柿木村総合振興計画 「健康と有機農業の里づくり」を宣言
2000	有機農業研究大会しまね大会（大会実行委員長：井口隆史）
2005	農業と環境を考えるフォーラム（実行委員長：井口隆史）
2011	有機農業学会公開フォーラム in 雲南

写真１　井口氏近影

写真２　インタビューの参加者

引用・参考文献

朝日新聞「消費者に無農薬牛乳　松江の「たべものの会」軌道に」1975年12月14日、12面
朝日新聞「「若者らの関心を」有機農業研究会大会に全国から700人」2000年２月６日、29面
朝日新聞「貫いた現場重視　故・安達生恒島根大名誉教授」2000年10月12日、31面
安達生恒編『農業の論理とはなにか：近代化と農民』（安達生恒，長須祥行，松永伍一編『講座　農を生きる』１巻）三一書房、1975年
安達生恒編『“たべもの”を求めて：食糧危機と農民』（安達生恒，長須祥行，松永伍一編『講座　農を生きる』２巻）三一書房、1975年
安達生恒『夢のオーガニック・ファーム―朝霧幸嘉の農業発想』ダイヤモンド社、1997年
井口隆史「新しい消費者運動」『山陰中央新報』〈１〉1978a 年８月４日、９面、〈２〉1978b 年８月８日、９面、〈３〉1978c 年８月９日、９面、〈４〉1978d 年８月10日、９面
井口隆史「“たべもの”論」「安達生恒論」編集委員会編『安達生恒論』安達生恒教授定年退官記念事業会、1981年、123-137頁
井口隆史「第11章 都市と農山村の交流」北川泉編著『中山間地域経営論』御茶の水書房、1995年、315-345頁
井口隆史「島根県における有機農業の現状と問題点および今後の課題」『しまね農政研』208、島根農政研究会、1996年、８-10頁
井口隆史「有機農業に挑む」『山陰経済ウィークリー』山陰中央新報、①2011a 年８月２日（1743号）、34-35頁、②2011b 年９月６日（1747号）、30-31頁、③2011c 年11月22日（1758号）、30-31頁、④2011d 年12月27日（1763号）、30-31頁、⑤2012a 年１月31日（1767号）、30-31頁、⑥2012b 年３月６日（1772号）、30-31頁、⑦2012c 年５月１日（1780号）、34-35頁、⑧2012d 年６月12日（1785号）、30-31頁、⑨2012e 年７月17日（1790号）、30-31頁、⑩2012f 年９月４日（1796号）、30-31頁
井口隆史「木次乳業を拠点とする流域自給圏の形成」井口隆史・桝潟俊子編著『地域自給のネットワーク』コモンズ、2013年、29-80頁
猪股趣「農業市場論に対する認識―農業市場経済学講座の発足によせて―」「安達生恒論」編集委員会編『安達生恒論』安達生恒教授定年退官記念事業会、1981年、106-122頁
大坂貞利「私の農本主義」『荒野 合本』、1974年、357-358頁
加藤歓一郎「奥出雲の地の塩以後の歩み」『雲南の灯』1974年、267-337頁
山陰中央新報「安達教授（島大）が退官記念講義」1981年３月15日、18面
山陰中央新報「ほっと HOT インタビュー　井口隆史島大教授　循環型農業の先駆者に」2000年１月30日、18面
志水清・浜田彪・上田博・福田充・大滝三好・妹尾弘之・北島照子・菊池幸子・木村俊博「島根県下の森永ドライミルク中害事件について」『島根県衛生研究所年報』１、1971年、23-27頁
日本経済新聞「島根の木次乳業、“手づくり農業”に帰る-牛で耕し水車で製粉。」1988年１月17日、11面
日本経済新聞「飛躍探る企業の素顔（25）木次産業-自然の素材大切に」1994年12月27日、23面
桝潟俊子「木次有機農業研究会の活動と地域自給」『土と健康』136、1983a 年、15-23頁
桝潟俊子「１．提携の成立過程」「２．消費者グループとの提携実態　（１）「たべもの」の会」『地域自給に関する研究（Ⅰ）―島根県奥出雲地域における農家の変容と有機農業運動―』国民生活センター、1983b 年、265-276頁

桝潟俊子「酪農農家の共同体を拠点とする有機農業運動」『有機農業運動と〈提携〉のネットワーク』新曜社、2008年、155-205頁
松原高広「かとうかんいちろう」『島根県大百科事典』山陰中央新報、1982年、385頁
森まゆみ『自主独立農民という仕事』バジリコ、2007年
和仁皓明「自然主義者、藤江才介と佐藤忠吉」『牧野のフロントランナー：日本の乳食文化を築いた人々』デーリィマン社、2017年、105-117頁

Regional network for food safety in the Izumo region: The Oral History of IGUCHI Takashi, emeritus professor at Shimane University

OTSU Hirotaka*, LI Wan**, TANAKA Naomi***
(*Dam Look Farm)
(**The United Graduate School of Agricultural Sciences, Tottori University)
(***International Joint Research Institute of Shimane University and Ningxia University)

〔Abstract〕

Based on our interview with Prof. IGUCHI, this paper summarizes the details of his activities and efforts to promote food safety. During the interview, Prof. IGUCHI discussed the Morinaga arsenic milk poisoning incident, his experiences in the citizen's movement, and the development of the organic farming movement in Shimane Prefecture. Then, through IGUCHI Takashi's movement since his worked at Shimane University, the history of the interaction between the "TABEMONO" NO KAI and KISUKI NYUGYO, the efforts of the organic farming movement in KISUKI Cho, and the details of collaborative activities between producers and consumers are cleared. Through the activities of the "TABEMONO" NO KAI case, we can learn about the regional network in the Izumo region when organic farming started.

Keywords: "TABEMONO" NO KAI, organic farming movement, KISUKI NYUGYO, IZUMO area, KISUKI Cho